

# 平成28年度胃がん直接施設検診成績

胃X線フィルム読影委員会 委員長 関 裕 史

平成28年度の新潟市胃がん直接施設検診の結果を報告する。

少傾向にあるX線検査を、内視鏡検査の増加傾向が支える格好で、前年と同率となった。

## 1. 胃がん検診の総受診者数・カバー率の推移 (表1)

カバー率は22.8%であった。平成15年以降減

## 2. 胃直接施設検診の成績

### 1) 施設検診の年齢層別成績 (表2、図1)

総受診者数は12,920例で、60歳以上が85.5%

表1 新潟市の胃がん検診総受診者数とカバー率の推移

年 度	21	22	23	24	25	26	27	28
対象者	285,439	290,042	293,658	295,581	297,830	298,732	300,561	300,027
集団検診	15,455	14,773	13,681	12,876	12,458	11,814	11,351	10,348
直接施設検診	17,362	16,704	15,525	14,744	13,687	13,386	13,518	12,920
内視鏡検診	35,383	37,554	38,644	41,306	43,274	44,281	43,581	45,089
合 計	68,200	69,031	67,850	68,926	69,419	69,481	68,450	68,357
カバー率	23.9%	23.8%	23.1%	23.3%	23.3%	23.3%	22.8%	22.8%

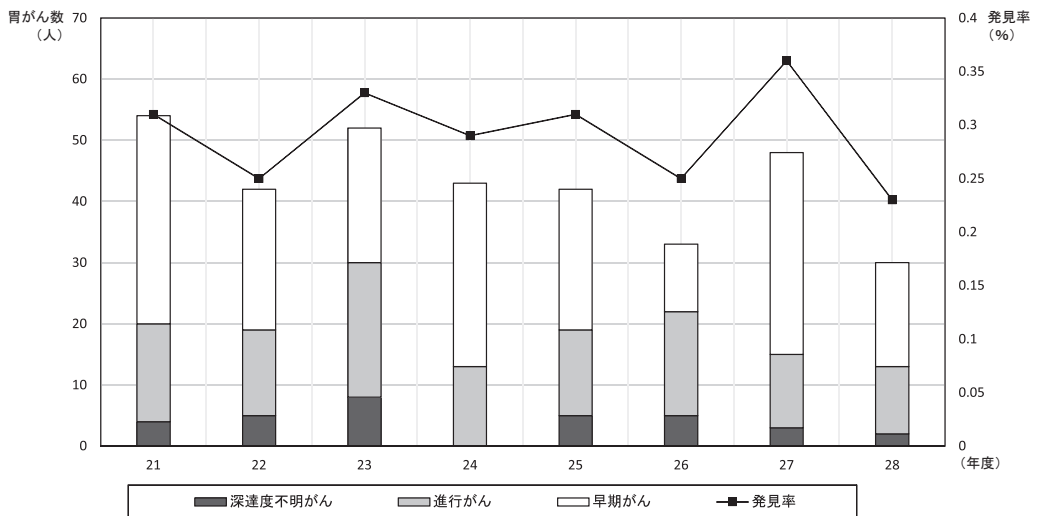


図1 胃施設検診発見胃がんの推移

表2 28年度 胃直接施設検診年齢疾患別成績

区分	受診者数 (A)		要内視鏡数 (B)		内視鏡受診数 (C)		精 密 検 査 結 果												
							発見胃がん (D)						胃がん疑い		胃ポリープ		消化性潰瘍 胃潰瘍		
	確定胃がん			深達度不明がん															
	男	女	男	女	男	女	進行がん	早期がん	不明がん	男	女	男	女	男	女	男	女		
40歳	103	362	1	12	1	11										1	5		
45歳	32	67	2	2	1	1										1	1		
50~54歳	163	382	7	15	7	13										7	1	1	
55~59歳	256	514	15	16	8	15		1							2	3	4(3)	1(1)	
60~64歳	651	1,123	50	40	42	36		1							8	6	8(8)	2(2)	
65~69歳	1,794	1,730	124	81	102	69	3	1	2	2		1			15	16	20(16)	2(1)	
70~74歳	1,241	1,127	86	70	68	60	1		4		1				9	16	11(9)	4(4)	
75~79歳	952	930	57	47	52	38	1		2	2					8	6	9(8)	3(1)	
80~84歳	522	529	33	25	27	21	3		2	1					8	8	1(1)	3(2)	
85歳以上	207	235	14	15	10	10	1		1						3	5	2(2)		
計	5,921	6,999	389	323	318	274	9	2	12	5	1	1			55	73	56(47)	16(11)	
	12,920		712		592		11		17		2		0		128		72(58)		
			B/A 5.5%		C/B 83.1%		D/A 0.23%		早期がん率 60.7%								88(73)		

区分	精 密 検 査 結 果																	
	消化性潰瘍				腺腫		胃粘膜下腫瘍		十二指腸ポリープ		食道がん		その他の悪性腫瘍		その他		異常なし	
	十二指腸潰瘍		共存潰瘍															
男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	
40歳							1										5	
45歳																		
50~54歳							2							1	1	5	2	
55~59歳		3(3)					1				1(1)			1	3	1	2	
60~64歳		3(3)	1(1)				2	1	1				1	6	6	15	17	
65~69歳	2(2)		3(2)		1		2	7						15	8	39	32	
70~74歳	1(1)				1	1	2	3				1		8	12	29	24	
75~79歳	1(1)		1(1)		1	1	6	1						4	2	19	23	
80~84歳			1(1)											3	2	9	7	
85歳以上						1					1(1)			1		2	3	
計	4(4)	6(6)	6(5)		3	3	12	16	1		2(2)	1	1	39	34	119	115	
	10(10)		6(5)		6		28		1		2(2)		2		73		234	
	88(73)																	

※その他の悪性腫瘍：悪性リンパ腫 (2)  
 ※深達度不明がん：問合せ中 (1) 原発不明 (1)  
 ※ ( )：瘢痕、枠内に再掲

(11,041/12,920)である。60歳以上の比率は前年とほぼ同率だった。

X線直接検診受診者数は前年度に比べ598例(4.4%)減少している。要内視鏡率は5.5%(712/12,920)、内視鏡受診率は83.1%(592/712)であった。要内視鏡例の内視鏡受診率は例年よりやや低率となった。

内視鏡による精密検査結果は、発見胃がん30

例、0.23%で、早期がん17例、早期がん率60.7%(17/28)であった。発見胃がん数、発見率ともに例年に比べて低率であった。早期がん率は60%台でほぼ例年並み。その他は、ポリープ128例、消化性潰瘍88例、腺腫6例、粘膜下腫瘍28例、十二指腸ポリープ1例、食道癌2例、その他の悪性腫瘍2例、異常なし234例という結果であった。

2) 年齢層別の発見胃がん (表3)

50歳以上の症例を5年きざみの年齢層別に発見胃がんを集計した。胃がん発見率は、55～59歳0.13%、60～64歳0.06%、65～69歳0.26%、70～74歳0.25%、75～79歳0.27%、80～84歳0.57%、85歳以上0.45%であった。発見率は65歳以上の高齢層で高率である。

3) 初回受診者数の推移 (表4)

胃X線施設検診初回受診者数は2,847例、全受診者比は22.0%で、前年度よりやや上昇した。

4) 初回・再診別成績 (表5)

初回受診者群の胃がん発見率は0.42%、再診者群では0.18%であった。早期がん率は、初回受診者群63.6%、再診者群58.8%で、高率であった前年度よりは低下した。

5) 受診形式と発見率 (表6)

胃がん発見率は、初回群、2年連続受診群、3年連続受診群で高く、隔年受診群では低かった。早期がん率は、2年連続群、初回群、4年連続群で高かったが、特定の傾向はみられない。

表3 年齢層別発見胃がん

区分	受診者数	要内視鏡数	内視鏡受診数		発見胃がん					
					進行	早期	不明	計	発見率	早期がん率
55～59歳	770	31	23	74.2%	1			1	0.13%	0.0%
60～64歳	1,774	90	78	86.7%		1		1	0.06%	100.0%
65～69歳	3,524	205	171	83.4%	4	4	1	9	0.26%	50.0%
70～74歳	2,368	156	128	82.1%	1	4	1	6	0.25%	80.0%
75～79歳	1,882	104	90	86.5%	1	4		5	0.27%	80.0%
80～84歳	1,051	58	48	82.8%	3	3		6	0.57%	50.0%
85歳以上	442	29	20	69.0%	1	1		2	0.45%	50.0%

表4 初回受診者数の推移

	21年度	22年度	23年度	24年度	25年度	26年度	27年度	28年度
受診者数	17,362	16,704	15,525	14,744	13,687	13,386	13,518	12,920
初回受診者数	4,015 23.1%	3,555 21.3%	2,904 18.7%	2,966 20.1%	2,616 19.1%	2,552 19.1%	2,711 20.1%	2,847 22.0%

表5 初回・再診別成績

	受診者数 (A)	要内視鏡 (B)	内視鏡受診者 (C)	発見胃がん			
				総数 (D)	進行	早期	深達度不明
初回	2,847	199 (B/A) 7.0%	168 (C/B) 84.4%	12 (D/A) 0.42%	4	7 63.6%	1
再診	10,073	513 (B/A) 5.1%	424 (C/B) 82.7%	18 (D/A) 0.18%	7	10 58.8%	1
合計	12,920	712 (B/A) 5.5%	592 (C/B) 83.1%	30 (D/A) 0.23%	11	17 60.7%	2

6) 発見胃がんの最終検診歴と検診方法 (表7)

発見胃がん例の最終検診歴を見ると、初回群12例、1年前群15例、2年前群1例、3年前群2例であった。1年前群の最終検診方法は直接X線15例、2年前群では直接X線1例、3年前群では直接X線1例、内視鏡1例であった。

7) 偽陰性例・前年検診受診症例の検討 (表8)

久道の定義による偽陰性例、すなわち、発見胃がんのうち前年受診時に異常を指摘されなかった15例についてみると、内訳は、進行がん

5例、早期がん9例、深達度不明がん1例であった。いずれも前年検診時ダブルチェックされていた。

この15例のうち10例が胃がんフィルム検討会でretrospectiveに検討された。この中で、振り返って前年度のフィルム上で病変を指摘できた症例が3例、30.0%にみられ、発見時には早期がん1例、進行がん2例であった。前年度の画像では病変を明確には指摘できなかった症例が7例、70.0%にみられ、発見時は早期がん6例、進行がん1例であった。

表6 受診形式と発見率

	なし (初回)		2年連続		3年連続		4年以上連続		隔年		不定期	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
進行がん	4		1			1	2	1	1		1	
早期がん	5	2	3		1		3	2				1
深達度不明がん		1			1							
がん/受診者数	9/1,174	3/1,673	4/597	0/652	2/607	1/654	5/2,741	3/2,892	1/422	0/596	1/380	1/532
発見率	0.77%	0.18%	0.67%		0.33%	0.15%	0.18%	0.10%	0.24%		0.26%	0.19%
がん/受診者数	12/2,847		4/1,249		3/1,261		8/5,633		1/1,018		2/912	
発見率	0.42%		0.32%		0.24%		0.14%		0.10%		0.22%	
早期がん率	63.6%		75.0%		50.0%		62.5%		0.0%		50.0%	

\*初回は3年以上受診歴なし

表7 発見胃がんの最終検診歴と検診方法

	なし (初回)	1年前 (27年度)			2年前 (26年度)			3年前 (25年度)		
		直接	内視鏡	間接	直接	内視鏡	間接	直接	内視鏡	間接
進行がん	4	5			1					
早期がん	7	9						1	1	
深達度不明がん	1	1								
計	12	15			1			2		

表8 偽陰性

	前年受診	前回検診のダブルチェック状況		前年検診の結果				症例検討会	示 現		
		ダブルチェック	シングルチェック	異常なし	有所見 精検不要	要精検	要治療		+	-	±
進行がん	5	5		4		1		3	2	1	
早期がん	9	9		9				7	1	6	
深達度不明がん	1	1		1							
計	15	15		14		1		10	3	7	

表9 読影形式別成績

	受診者数 (A)	要内視鏡数 (B)	内視鏡受診者 (C)	発 見 胃 が ん						
				総数 (D)	進 行	早 期	深達度不明 がん	発見率 (D/A)	早期 がん率	対内視鏡受診者の 発見率 (D/C)
シングルチェック 機 関 (6)	361	41 (B/A) 11.4%	35 (C/B) 85.4%	1		1		0.28%	100.0%	2.86%
ダブルチェック 機 関 (94)	12,559 (97.2%)	671 (B/A) 5.3%	557 (C/B) 83.0%	29* <sup>1</sup>	11* <sup>1</sup>	16	2	0.23%	59.3%	5.21%
計 (100機関)	12,920	712	592	30	11	17	2	0.23%	60.7%	5.07%

\*至急病院に紹介したシングルチェックを含む

表10 ダブルチェック発見胃がんの内容

(シングルチェック1件を除く)

	件 数	主治医－生検不要 検討委員会－要内視鏡	両方とも 要内視鏡	主治医－要精検 検討委員会－生検不要
進行がん	10	3	7	
早期がん	16	6	9	1
深達度不明がん	2		2	
計	28	9	18	1

### 8) 読影形式別成績 (表9)

シングルチェック機関の361例のうち、要内視鏡は41例、11.4%で、内視鏡受診は35例、85.4%、ダブルチェック機関の12,559例のうち、要内視鏡は671例、5.3%で、内視鏡受診は557例、83.0%であった。

シングルチェック機関では1例、0.28%に胃がんが発見され、早期胃がんであった。ダブルチェック機関では29例、0.23%に胃がんが発見され、早期がん率は59.3%だった。対内視鏡受診者の発見率は、シングルチェック機関では2.86%、ダブルチェック機関では5.21%であった。ダブルチェック機関での発見胃がんの中には、X線検査で明らかに悪性病変が認められ、ダブルチェックを経ずに病院に紹介した症例が1例含まれている。

症例数はダブルチェック機関が圧倒的に多く97.2%を占めている。最近ではダブルチェックされている症例がほとんどで、胃がん診断の向上に寄与していると思われる。

### 9) ダブルチェック発見胃がんの内容 (表10)

主治医が異常なしと判定したがダブルチェックにより拾い上げられた胃がんが9例、32.1% (9/28) にみられ、早期がんが6例、進行がんが3例であった。ダブルチェックの有用性が示唆される結果である。

### 3. まとめ

- 1) 胃がん検診のカバー率は22.8%で、前年と同率だった。X線検査の減少傾向、内視鏡検診の増加傾向が続いている。
- 2) 胃直接施設検診における総受診者数は12,920例で、前年度に比べ598例 (4.4%) 減少している。要内視鏡例の内視鏡受診率は83.1%で、例年よりやや低率であった。発見胃がんは30例、0.23%で、例年より低率となった。早期がん率は60.7%だった。
- 3) 施設検診の胃がん発見は65歳以上の高齢層で高率であった。
- 4) 検診発見胃がんのうちretrospectiveに検討

を行った10例において、振り返って前年度のフィルム上で病変を指摘できた症例が3例、30.0%、病変を明確には指摘できなかった症例が7例、70.0%にみられた。

5) 施設検診発見胃癌30例のうち29例はダブルチェックで拾い上げられた症例で、ダブ

ルチェックによる早期がん率は59.3% (16/27)であった。また、主治医が異常なしと判定したがダブルチェックにより発見された発見胃癌が9例、32.1% (9/28)にみられた。ダブルチェックの有用性が示唆される。